人文会ニュース

1989.10

人文書講座18
音楽文化の現在 ……渡辺　裕　1

「図書館」北の国から ‥札幌市中央図書館　川嶋康男　13

北海道研修旅行報告 ……弘報委員会　22

消費税アンケート調査結果
……調査・研修委員会　菊池明郎　26

56

業務用

カミーユ・クローデル
パリス 彫刻家ロダンの弟子で愛人の、狂気にいたる全貌。伝記、書簡、病誌、作品。写真百頁。なだ・宮崎訳 ２９５円

内なる肖像 一生物学者のオデュッセイア
ジャコブ 人生＝生命の意味を求めてユダヤ人の一人っ子はどう生きたか？ 発潮たる型破りの自伝。辻 由美訳 ３５６円

見えるものと見えないもの
メルロ＝ポンティ 人間と世界をめぐる逆説を描き、新たな存在論を提示した晩年の未完の大著。滝浦・木田訳 ６３５６円

強迫神経症 《精神医学》4
クレベリン 強迫神経症、性的倒錯、反社会的人格等への鋭い臨床像。今日の情況への警告の書。遠藤・稲浪訳 ３２５０円

東京文京本郷3丁目17-15 みすず書房

多賀城碑 その謎を解く
◉安倍辰夫・平川南編
定価４８００円

評釈 魏志倭人伝
◉水野 祐著
定価１５５００円

日本中世史入門
◉中野栄夫著
定価２６００円

巫女の歴史 雄山閣ブックス 1
◉山上伊豆母著
定価２２００円

雄山閣 ＊価格は税込みです。
千代田区富士見2／振替東京3-1685

竹内智恵子著
昭和遊女考
定価２５７５円（本体２５００円・税75円）

明治・大正・昭和の前半期、北の都に栄えた遊廓街に身を置き、遊女として苦界に生きねばならなかった女たちからの聞き書き。廓という特殊社会を織りなす哀切で凄惨な人間絵巻を八人の昔遊女の肉声で伝える。12年の歳月をかけた著者畢生の力作。

東京・文京 小石川3-7 未來社 電話(03) 814-5521

ヤンゲージ
「現代国語」解読講座
◉〝若者たちの神々〟の文章批判◉
郷原 宏著 四六判カバー付 定価1442円
伊藤比呂美・俵万智・浅田彰・赤川次郎・田中康夫・吉本ばなな、など当代の文章の旗手たち。その文章に、「自ら成熟することを拒否する」甘えを見る。

むらの戦後史
◉南伊予みかんの里・農と人の物語◉
安達生恒著 四六判カバー付 定価1700円
みかんの産地として名高い南伊予の村を舞台にくりひろげられる農民たちの夢と苦悩。敗戦から現在までの歩みをとおして戦後農業の光と影を描き出す。

有斐閣 東京・千代田・神保町 ☎ 03-265-6811
（定価はすべて税込みです。）

〔人文書講座18〕

音楽文化の現在

渡辺　裕

一年ほど前のことだと思うが、美学をやっているある友人から、「音楽が好きなので音楽の本を読みたいと思って書店に行くのだけれど、買いたいと思う本がちっともない」と言われたことがある。こちらは曲がりなりにも音楽学の専門家として音楽に関する情報を送り出す側に属する人間であり、そういう状況に対する一半の責任を負っているわけであるから、無責任に同感していられる立場でもないのだが、私自身も最近書店に行くと音楽書の棚の前を素通りして他の本のところに行ってしまうことが多いので、思わず同意して議論が盛り上がった。

どういうことなのだろうか？　その友人が言うには、たとえば自分はモーツァルトが好きなので、モーツァルトに関連する本を読みたいと思って眺めてみるのだが、たしかにタイトルに「モーツァルト」と冠せられた本はたくさんあるものの、どれをみても「イマイチ」買う気がおこらないというのだ。ことはおそらくモーツァルトに限った話ではない。全体としてみても音楽に関する出版物の量は決して少ないとはいえない。大書店の「音楽」と書かれた棚のところに行けば、あふれんばかりの本がわれわれを出迎えてくれるから、よほど専門的で特殊な

テーマのものを探すでもない限りは、何か関連する本が見つかるはずである。それなのに、なのである。

モーツァルトのような人気のある作曲家だったら、ざっと見積もっても二〇冊以上の本が出ているであろう。伝記、作品研究、あるいはそれらをセットにした「人と作品」といったたぐいの本、さらには演奏論、名盤案内、あるいは「私のモーツァルト」といったたぐいのエッセイ集、初心者向けから専門的なものまで、様々な本が流通しており、それらの水準も決して低いわけではない。だが、とその友人は言う。たしかにそれらの本にはモーツァルトの生涯が、作品が、そして演奏が事細かに論じられてはいる。けれども、どれを見てもさっぱり問題の広がりが感じられないのだ、と。

一言で言うなら、一般的に言って音楽の本は非常に自己完結的な性格が強く、他の文化領域や政治的・社会的状況とのつながりが希薄なものが多いのである。作曲家の伝記は、彼が幼いころからいかにたぐいまれなる音楽的才能を示し、どのような音楽的キャリアを積んで、どのような独創的作品を書いたかを事細かに示そうとする。また、作品研究は、その作品が作曲された状況を簡単に述べたあとで、専門用語を駆使してそれがいかに緻密に有機的に構成されているかを語り出す。万事がそういう具合であり、音楽の社会的意味や文化の中で音の果たす機能、思想や他の芸術領域とのかかわりといったことがさっぱり語られないのである。そしてこのことは別に作曲家論や作品論の領域に限った話ではない。「音楽史」といった本からして（そもそも「音楽史」というタイトルでありながら「西洋」の音楽史のことしか書かれていない場合がほとんどであるということ自体きわめて不思議なのだが）あたかも音楽以外の歴史は存在しないかのごとくに大作曲家と名曲のカタログが展開されているだけの場合が多いのである。一般史や他の芸術ジャンルの歴史との関係は触れられているとしてもほんの申し訳程度で、音楽の歴史はもっぱら、どのような作曲家がいかに新しい技法を考案し、どのような傑作を作り出したかということの集積として描かれているのである。こんな状況が件の友人にとっては、「問題の広がりの感じられない」ものにうつったにちがいない。モーツァルトの時代の造形芸術や思想、それらを産み出した社会背景といったものに関心をもっているその友人は、どの本を見ても

自分の問題意識との接点を見い出すことができなかったのだろう。そしてこの友人ならずとも、音楽書のコーナーに立って自らの知的好奇心に何となく欲求不満を感じながら買わずに立ち去る人々が相当数あるのではないかと思われる。

どうしてこのようなことになってしまったのだろうか？

いろいろ理由はあるだろうが、一番罪深いのは一九世紀に成立した「音楽の自律性」の思想である。そもそも一九世紀という時代は、制度としての芸術が歴史上初めて確立した時代であり、純粋に作品制作を生業とする芸術家という職業が誕生したのであった（それまではたとえば画家は、貴族のために肖像画を描いてやるとか布教の目的で教会の祭壇画を描くといった社会的効用性によって価値を認められていたにすぎなかった）。そしてそれと並行して、作品はそれ自体に価値があるとか、作品を社会的その他のコンテクストから切り離して純粋に作品として鑑賞するのが芸術の本来のありかたであるという認識が一般化したのであった。このような流れの中で、そうした「芸術の自律」の思想が最も極端な形で現われたのが音楽という分野であったのだ。これにもいろいろの歴史的経緯があるのだが、そうでなくとも言語や造形芸術のように具体的な事物や思想を表現することが不得意なこの芸術が、その「自律」を主張しはじめたとたんに他の領域とのつながりを失って、あたかもそれだけで完結しているかのような様相を呈するようになることは容易に想像がつくだろう。要するに、音楽文化というのは政治や社会の状況、思想や他の文化領域の状況とは直接にかかわらない「自律」的な文化として、作曲家が作る音の抽象的な構成体によって担われてゆくものだと考えられるようになったのである。

「問題の広がりの感じられない」本が大量に出回っているという状況は、まさにこのような思想の置き土産なのである。作品そのものや作曲家それ自体を論じていれば十分であるということになり、それが思想的に何か意味をもつとか、政治的な動向とかかわっているなどということは考えもされないか、考えられたとしてもせいぜい副次的なものとみなされるにすぎないものとなる。ベートーヴェンの《英雄》や《運命》がフランス革命の音楽の影響を受けており、革命の思想とつながっているなどということよりは、これらの作品が作品としていかに見

事に構成されているか、そしてそれを作った作曲家がいかに天才にふさわしい人生を送ったかといったことのほうが音楽にとっては重要だということになる（≪英雄≫の作曲中にナポレオンが戴冠したというニュースを聞いてベートーヴェンがナポレオンへの献辞の部分を破いてしまったといった話はベートーヴェンと革命思想との関係を語るためではなく、この作品にまつわるエピソードとして触れられるにすぎない）。かくして「人と作品」式の本のオンパレードと相成るのである。

しかし、「音楽の自律」の思想の上にあぐらをかいたこの種の本が今や飽きられているという事実は、今音楽文化をめぐる状況が確実に変化しはじめていることをはっきりと示している。そして、音楽研究の傾向やそれにかかわる出版の動向もそれに沿った形で今明らかに変わり始めている。欧米の音楽学研究の傾向にみられるはっきりとした方向転換が日本における出版状況にまだ必ずしも十分に反映されているとは言い難いとはいえ、それでも、最近日本で出版される音楽書の中にはこれまでになかった種類のものが多々現われてきた。注意深く探せば、件の友人も面白いと思えるような本を手にすることができるだろう（もちろん、書店のほうでそういう面白い本をちゃんとそろえているという前提での話だが）。そこで、以下ではそうした最近の新しい研究動向の中から主だった傾向をとりあげながら整理してみることにしよう。

まずは、伝統的な作曲家論・作品論の領域から始めよう。すでに述べたように、作曲家や作品を論じる際にその時代の社会や文化のコンテクストから切り離して論じるのがかつての「自律的」音楽書の特徴であったが、最近出版されるこの種の本では、当然のことながら、つとめてコンテクストの中に置き直して論じようとする傾向が顕著になってきている。もっと極端に言えば、作曲家像を描いたり作品論を展開したりするというよりは、作曲家や作品を材料としてそこから時代状況を読み解いてゆくといった体のものが増えてきている。マーラーの音楽の中から世紀末のウィーンでユダヤ人のおかれていた状況を読み解いてゆこうとするヘンリー・リーの≪異邦人マーラー≫などはその代表的な例だろう。

こうした中で落とすことのないのが「受容史」と呼ばれる研究分野の成立である。かつて作品が「それ自体」として鑑賞されるべきものであったときには、作品その

ものを論じることに主眼が置かれていたのであるが、作品を歴史的コンテクストの中におく考え方にたつと、作品というものは作者が作り終えたとたんに完成するというよりは、作者の手を離れて世に出てから時代の流れの中でいろいろなコンテクストの中に置かれて様々に形を変えるものであるという捉え方が出てくる。それぞれの時代に人々がその作品をどのように捉えたかという歴史を研究することによって、時代状況のありようの変化が浮き彫りになるというわけである。小林義武の≪バッハ復活≫はその最も成功した例であるといってもよいだろう。

さらに面白いのは、そういう中で一九世紀の作曲家・作品研究の問い直しが行われ、かつて描かれ、われわれがこれまで常識として受け入れてきた作曲家像や作品像自体が一九世紀の歪んだ受容によってもたらされた虚構であるという事実がいろいろな形で明らかにされ始めているということである。「宗教人バッハ」、「清らかなモーツァルト」、「意志の人ベートーヴェン」といったイメージがいかに一面的で事実に反する面をもっているかが明らかにされ、一九世紀の間にそのような「神話」が形作られてゆく過程が解明される。受容史研究とは少し離れるが、そういう問い直しを踏まえた新しい作曲家像という点では、ヒルデスハイマーの≪モーツァルトは誰だったのか≫などもあげられよう。

アメリカの社会と大学

佐藤和夫◎著

能力のある人にとってアメリカは快適な国だという。アメリカに住む大学教授が，ニューヨークと東京のちがい，大学・研究制度の日米比較，アメリカにおける日本経済研究の現状などを辛口でつづる好エッセー。

1960円(税込)

ゆとりの時代へ

完全週休二日制・土曜日を社会の休日にする推進会議◎編

今，人びとのこころはゆとりのないままに，カネやモノに向かって暴走しつつある。暮らしにゆとりをとりもどすために必要なものは何か。完全週休二日制の実現をめざす立場から，一歩立ち止まって考える。

1300円(税込)

人文的数学のすすめ

銀林　浩◎著

現代では数学は理科系の学問だといって済ますわけにはいかない。文科系の諸科学も数学と縁が深くなってきているからである。――そこで，文科系の人たちを視野の中心に据えた，真に《人文的》な数学を提案する。

2400円(税込)

日本評論社

豊島区南大塚3・10・10/☎987・8621

そういう一九世紀的「常識」の問い直しということから言えば、近代の音楽文化を支えてきた「コンサート」のシステムの歴史的由来を解明する研究なども同一の線上にあるものといえるだろう。われわれは音楽を聴きたいものがチケットを買って出かけてゆき、集まって静かに音楽を鑑賞するという今のコンサートのありかたを当然のことと考えて怪しまないが、実はこういうありかたは一九世紀になって確立したものであって、決して普遍的なものではないのである。ウィリアム・ウェーバーの《音楽と中産階級》は、このシステムがいかにでき上がったかに関する緻密な実証的研究である。また、ハインリヒ・シュヴァープの《コンサート》は、こうした演奏会のありかたを物語る歴史的図像資料を集めた貴重な資料集である（ついでながらこの本は、音楽之友社から出ている《人間と音楽の歴史》というシリーズの一巻であり、シリーズ全体としてもきわめて興味深い）。こうした解明を通して、一九世紀以来の「作品そのものを聴く」聴き方自体がいかにこの時代の社会的・政治的状況とかかわって成立してきたかがあぶり出されてくる。

こうして社会的・政治的コンテクストを離れて「音だけ聴く」ことの虚構性が明らかになってくるにつれて、これまでは音楽文化にとって周縁的なものと考えられてきた政治とのかかわりという問題が組織的に見直されるようになってくる。すでにヨーロッパではナチス時代の音楽状況を対象とした研究などが進みつつあり、ナチスに利用された作曲家や演奏家に関して様々な伝記や資料集が出版されている。そういう中でこの時代の指揮者フルトヴェングラーの活動を取り扱ったものが一冊飜訳されている（ベルント・ヴェスリング《フルトヴェングラー》）。また、こうした「利用」された音楽家とは逆に、積極的に政治にかかわった音楽家も再評価されている。一九二〇年代の「ワイマール共和国時代」に左翼運動とかかわりながら活動したクルト・ヴァイル、ハンス・アイスラーといった作曲家に関する研究も最近相次いで出版されている。また状況は異なるが、ショスタコーヴィチ、ロストロポーヴィチといったソヴィエトにあって反逆したり亡命したりした音楽家の手記なども関連させてみると面白い。こうした例をみてみる時われわれはつい、音楽が政治に「利用」されたり「弾圧」されたりすることを嘆き、「文化の政治からの自立」を主張してしまう

のだけれども、考えてみればそういう「政治からの自立」などという思想そのものが一九世紀的幻想にすぎないことが今明らかになりつつあるといってもよいのである。

こういう状況を考えてみるとき、音楽社会学の研究が今非常に盛んになりつつあることは当然すぎるほど当然だろう。一九世紀的な音楽研究が作品や作曲家だけに焦点をあてるあまり、それを受け入れる聴衆や社会のありかた、あるいは音楽の商品性といった問題が完全に周縁におしやられていたのに対し、今、様々な形で音楽を社会というコンテクストの中においた問い直しが行われ、音楽から社会を「読む」試みが次々と出てきている。そういう際に、未だに作品が「時代を超える価値」をもつという幻想にこだわっているクラシックの分野よりも広告音楽や歌謡曲（今どきそんなジャンルわけは成り立つのだろか？）に関する考察のほうがはるかに面白い。小川博司の《音楽する社会》は現代日本の音楽文化をそういう観点から総括的に扱った気鋭の本だが、最近では様々な個別研究が出されており、広告音楽に関する小川らの共同研究の成果である《消費社会の広告と音楽》をはじめ小倉千加子、竹田青嗣らの本はいずれも音楽を通して日本の社会や文化のありようを浮き彫りにするものとなっている。その他、ウォークマンというメディアを手がかりとして現代消費社会の音楽文化を論じた細川周平の《ウォークマンの修辞学》も面白い。かつては「時代を超える価値」の幻想にこだわっていた「クラシック」の音楽文化もそういう動きと無縁ではありえない。《聴衆の誕生》では筆者はそういう視点でクラシックの文化を論じてみた。

ここで少し話題を変えてみよう。今までわれわれがあたりまえだと思って慣れ親しんできた音楽文化全体が問い直され、そのありかたが決して普遍的なものではなく、多様な可能性のうちの一つにすぎないということが明らかになってくると、別に西洋だけがすべてではないということになってくる。「エスニック」への関心はそのような形で高まってきているといってもよいだろう。西洋自体にそういう関心が出てきており、民族音楽学の成果が次々と出始めている。最近の民族音楽学研究の特徴は、かつての「比較音楽学」のように音楽そのものの研究に限定して音組織の比較を行ったりするようなものが影をひそめ、文化人類学の一環として位置付けられるような

ものが主流になっていることにある。音楽を音楽だけ取り出してみようとすること自体がそもそも西洋的なのであり、文化全体の中で音というものがどういう役割を果たしているかということから捉えないことには本当に理解したことにはならないというわけである。そういう観点から西洋とはまったくちがう人間と音とのかかわり方を明らかにした優れた研究が出てきている。パプア・ニューギニアのカルリ族を対象としたアメリカの若手の学者スティーヴン・フェルドの研究《鳥になった少年》はその例である。また日本でも川田順造がアフリカ・ブルキナファソのモシ族を対象として行っている一連の研究などはそういう意味で面白い。これらの研究をみてみると音楽研究であることをこえて人間の音の認識のありよう、人間にとっての音の根源的意味といった様々な基本的問題がえぐり出されており、幅広く様々な分野の人々の関心に訴えるものがあるに違いない。

こういう人間にとっての音の意味といった問題になってくると、最近の「環境音楽」に関連する本をあげないわけにはいかない。一九世紀的な音楽観にあっては音楽とは作曲家の作った作品であり、音楽体験とはそういう作品を鑑賞することに他ならなかったから、われわれの身の周りの環境の音などというものは音楽文化に属するものとは考えられていなかった（だから繊細な耳をもっているはずの音楽家が街の中の騒音には意外に鈍感であったり、ひどいときには自分が騒音の発生源になっても平気だったりしていたのである）。しかし最近の動きの中で、音楽文化というものは日常われわれを取り囲んでいる周囲の音なども含めて考えなければならないという考え方が出てきて、人間にとっての環境の音の意味を考えるサウンドスケープという思想があらわれたり、作曲家もまた身の周りの音をデザインするという新しいコンセプトをもって仕事をしたりするようになってきている。この分野の古典的名著とでもいうべきなのがカナダの作曲家マリー・シェーファーの《世界の調律》であるが、この分野で活動する日本の気鋭の若手研究者の論考や作曲家のエッセイなどを集めて編まれた《波の記譜法》など興味が尽きない。

ざっと駆け足でみてきたが、こうみてみると結構面白い本もたくさん出ているものである。件の私の友人ももっとていねいにみてみれば、結構面白い本を見つけて満足

して帰ったのかもしれない。ただ実際には書棚のスペースの関係などもあるのだろうが、音楽書のコーナーが昔ながらの「人と作品」式の本に占領されて、せっかくの刺激的な本がなかなか書店の店頭で見かけられないことも事実である。もう一つ具合の悪いのは、このように音楽という分野の「自律性」が侵されてくると、音楽書とその他の分野の本との境界が曖昧になるという傾向が生じてくるということである（だからカール・ショースキーの《世紀末ウィーン》などという一見したところ音楽とは何も関係なさそうにみえる本の中に作曲家シェーンベルクに関する刺激的な論考が含まれていたり、阿部謹也の《中世の光の下で》などというためらわずに一般史に分類されるような本の中にサウンドスケープ的な「鐘の音」論が展開されたりしているのである）。音楽に関する本を書く著者の関心もまた音楽畑の人ばかりとは限らず、むしろ昔ながらの常識に囚われない外の畑の人が面白い音楽論を展開しているケースのほうが多いくらいである。このように著者の関心も読者の関心も拡散しているから、著者と読者が共通の関心をもって出会える場所がなかなかできにくくなってしまう。件の友人にしても、あるいは音楽の棚ではなく他の棚をみれば自分の関心につながる音楽論をみつけることができたのかもしれなかった。こうなってくるとわれわれ読者も希望の本を探すのは大変だが、そういう出会いの場を準備する書店の係の方もさぞかし大変であろう。一方で面白い本が売れず、他方で面白い本が手に入らないという相互的な欲求不満が生じている現状はたしかに一九世紀的なジャンルの枠が消失しつつある文化状況に由来するものであるかもしれないが、その現実的な解決は、書店での品揃えと配置にかかっているといっても過言ではないからである。それにしても大変な時代になったものである。

「音楽文化の現在」を知る本

(1)美学／社会学

H・エッゲブレヒト他編『音楽美学――新しいモデルを求めて』（戸澤義夫他訳）勁草書房

C・ダールハウス『音楽美学』（森芳子訳）音楽之友社

T・H・アドルノ『音楽社会学序説』（渡辺健・高辻知義訳）音楽之友社

T・H・アドルノ『不協和音』（三光長治・高辻知義訳）音楽之友社

U・ディベーリウス『管理社会の音楽』（渡辺健・恒川隆男訳）音楽之友社
W・ウェーバー『音楽と中産階級――演奏会の社会史』（城戸朋子訳）法政大学出版局
J・アタリ『音楽／貨幣／雑音』（金塚貞文訳）みすず書房
B・ネトゥル『世界音楽の時代』（細川周平訳）勁草書房
E・ロート『芸術としての音楽・商品としての音楽』（山田ゆり訳）勁草書房
J・ブラッキング『人間の音楽性』（徳丸吉彦訳）岩波書店
D・シャルル『ジョン・ケージ』（岩佐鉄男訳）書肆風の薔薇
北沢方邦『メタファーとしての音――音楽的知の記号学』新芸術社
細川周平『音楽の記号論』朝日出版社

(2)新しい解読の試み
W・ヒルデスハイマー『モーツァルトは誰だったのか』（丸山匠訳）白水社
F・ノスケ『MOZART オペラの解読』（細川周平訳）冬樹社
F・ナイト『ベートーヴェンと変革の時代』（深沢俊訳）法政大学出版局
S・ヤロチニスキ『ドビュッシー――印象主義と象徴主義』（平島正郎訳）音楽之友社
H・A・リー『異邦人マーラー』（渡辺裕訳）音楽之友社
北沢方邦『沈黙のパフォーマンス』新芸術社
丸山桂介『プロメテウスのシンフォニー――精神史としてのベートーヴェン』春秋社

(3)現代社会／大衆／音楽
渡辺裕『聴衆の誕生――ポストモダン時代の音楽文化』春秋社
小川博司『音楽する社会』勁草書房
細川周平『ウォークマンの修辞学』朝日出版社
林進・小川博司・吉井篤子『消費社会の広告と音楽』有斐閣
音楽の手帖『現代日本の音』青土社
村瀬卓『東北は唱う』筑摩書房
竹田青嗣『陽水の快楽』河出書房新社
竹田青嗣『ニューミュージックの美神たち』飛鳥新社
小倉千加子『松田聖子論』飛鳥新社
岩淵東洋男『わたしの音響史――効果マンの記録』社会思想社
佐藤良明『ラバーソウルの弾みかた――ビートルズから《時》のサイエンスへ』岩波書店

(4)歴史的考察
H・W・シュヴァーブ『コンサート　一七世紀から一九世紀までの公開演奏会』（『人間と音楽の歴史』）音楽之友社
W・ダンウェル『音楽文化史』（村田武雄他訳）筑摩書房

吉川英史編『日本音楽文化史』創元社
西原稔『音楽家の社会史』音楽之友社
樋口隆一『ミューズの道草』春秋社
三宅幸夫『歴史のなかの音楽』平凡社
浅井香織『音楽の〈現代〉が始まったとき』中央公論社

(5)受容史／受容論
小林義武『バッハ復活』日本エディタースクール出版局
海老沢敏『むすんでひらいて考』岩波書店
中村洪介『西洋の音、日本の耳――近代日本文学と西洋音楽』春秋社
國安洋『モーツァルトの美学』春秋社

(6)環境音楽／エコロジー／エスニック
R・M・シェーファー『世界の調律――サウンドスケープとはなにか』（鳥越けい子他訳）平凡社
小川博司他編『波の記譜法――環境音楽とはなにか』時事通信社
W・メルテン『アメリカン・ミニマル・ミュージック』（細川周平訳）冬樹社
秋山龍英訳編『民族音楽リーディングス』音楽之友社
A・P・メリアム『音楽人類学』（藤井知昭訳）音楽之友社
姫野翠『芸能の人類学』春秋社
S・フェルド『鳥になった少年』（山口修訳）平凡社
J・F・ベーレント『世界は音――ナーダブラフマー』（大島かおり訳）人文書院
川田順造『声』筑摩書房
川田順造『サバンナの音の世界』（カセットブック）白水社
土取利行『螺旋の腕』筑摩書房

(7)現代の批評眼
キーワード編集部編『クラシックの快楽』洋泉社
吉本隆明・坂本龍一『音楽機会論』トレヴィル（リブロポート）
大森荘蔵・坂本龍一『音を視る、時を聴く』朝日出版社
浅田彰『ヘルメスの音楽』筑摩書房
武満徹・川田順造『音・ことば・人間』岩波書店
藤原義久『アードリアーンの音楽――ヨーロッパ芸術音楽の終焉』芸立出版
諸井誠『音楽の現代史』岩波書店
秋山邦晴『現代音楽をどう聴くか』晶文社
矢野暢『二〇世紀の音楽』音楽之友社

(8)作曲家の発言
S・ヴォルコフ編『ショスタコーヴィチの証言』（水野忠夫訳）中央公論社
V・ウィリアムズ『民族音楽論』（塚谷晃弘訳）雄山閣出版
B・バルトーク『バルトーク音楽論集』（岩城肇編訳）御茶

の水書房
P・ブーレーズ『意志と偶然』（店村新次訳）法政大学出版局
P・ブーレーズ『ブーレーズ音楽論』（船山隆・笠羽映子訳）晶文社
I・クセナキス『音楽と建築』（高橋悠治訳）全音
J・ケージ『音楽の零度』（近藤譲訳）朝日出版社
尹伊桑（ユンイサン）／ルイーゼ・リンザー『傷ついた龍――作曲家の人生と作品についての対話』（伊藤成彦訳）未来社
L・バーンスタイン『答えのない質問』（和田旦訳）みすず書房
一柳慧『音を聴く』岩波書店
近藤譲『耳の思考』青土社
三宅榛名『音楽未来通信』晶文社
岩城宏之『行動する作曲家たち』新潮社

(9)行動する音楽家たち

N・B・ライク『クララ・シューマン』（高野茂訳）音楽之友社
E・リーガー『音楽史の中の女たち――なぜ女流作曲家は生れなかったのか』（石井栄子・香川檀訳）思索社
G・ヴァーグナー『ヴァイルとブレヒト』（岩淵達治訳）音楽之友社
A・ベッツ『ハンス・アイスラー　人と音楽』（浅野利昭・野村美紀子訳）晶文社
岩淵達治・早崎えりな『クルト・ヴァイル』ありな書房
B・W・ヴェスリング『フルトヴェングラー』（香川檀訳）音楽之友社
D・レストウ編『ランドフスカ音楽論集』（鍋島元子・大島かおり訳）みすず書房
M・ロストロポーヴィッチ／G・ヴィシネフスカヤ『ロシア・音楽・自由』（田中淳一訳）みすず書房
J・ホロヴィッツ『アラウとの対話』（野水瑞穂訳）みすず書房
J・マッグレーヴィ『グレン・グールド変奏曲』（木村博江訳）東京創元社
WAVE編『グレン・グールド』ペヨトル工房
G・ペイザンド『グレン・グールド――なぜコンサートを開かないか』（木村英二訳）音楽之友社
清水多吉『ヴァーグナー家の人々』中央公論社
高橋悠治『ことばをもって音をたちきれ』晶文社
黒沼ユリ子『アジタート・マ・ノン・トロッポ』未来社
日本音楽家ユニオン編『オーケストラに生きる』大月書店

渡辺　裕（わたなべ・ひろし）
一九五三年千葉県生まれ。東京大学文学部卒業。同大学院修了。現在、玉川大学専任講師。著書『聴衆の誕生』（春秋社）、訳書にH・C・ヴォルプス『一九世紀の音楽カリカチュア』（音楽之友社）、H・A・リー『異邦人マーラー』（音楽之友社）などがある。

「図書館」北の国から

札幌市中央図書館職員　川嶋　康男

どうも北国には、のんびり本を読むといった雰囲気が馴染まないようだ。海辺の砂浜で、パラソルの下に寝そべって本を読む光景は、どうみても暖かい南国のイメージである。

そんなわけかどうかは知らぬが、北海道に公立「図書館」が少ない。東京、大阪、神奈川、愛知、埼玉に次いで五六〇万人余りの人口を抱えながら、全道二一二の市町村に七六館の公立図書館では少なすぎる。

このうち、町村の数は一八〇と全国一の規模だが、町村立図書館は三四館よりない。（データはいずれも一九八七年三月現在のもの）

加えて、全国の書籍販売に占める北海道のシェアも低い。

大手取次のデータでは、五％シェアといわれる。例えば「平成作家」の代表格といわれベストセラーを出し続ける吉本ばななの『ＴＵＧＵＭＩ』は、一二五万部売れているといわれるが、北海道では六・二五万部しか出ていない。概して少ない「読書人口」である。

広大な自然に恵まれ、日本列島最後の秘境とさえ形容される北海道は、やはり「自然環境」だけが取り得なの

だろうか。

倉本聰のオリジナル脚本で全国的に話題を呼んだフジテレビ「北の国から」で紹介された手つかずの自然や、キタキツネやタヌキが家の傍までやってきて、夜陰に眼を光らせる人馴れしていない森の動物。一寸先の視界まで遮る吹雪に豪雪。コロポックルが棲んでいそうな深い森。四季おりおりの顔を見せる大雪山系の景勝など、北海道富良野を舞台に、大自然の営みをたっぷり伝えてくれたドラマには、都会生活では味わうことのできない貴重な「大自然」があった。

だが、仕事を終えた後や夜長に酒を呑む大人たちの姿はあっても、本を読む光景はついぞ見られなかった。

「自然」の素材がテレビドラマの発信地になりえても、「文化」や「情報」の発信源にはなれそうにない。

凍える手を擦りあわせながら本のページをめくる姿は、ロシア文学の世界にでも登場しそうだが、かつて北海道の石炭産業隆盛のころには、家屋の中の暖房の取りかたにも北国らしい光景が展開した。

私の実体験から、少し一人よがりな展開をさせてもらいたい。

私の故郷は、北海道西海岸の人口一万六千余りの漁師町、泊原子力発電所で話題を呼んだ岩内町。真冬ともなれば、潮の混じった雪を伴った浜風が、一寸先もかき消すような吹雪となる。シケの海は、二メートルを越す大波が石浜にうなりを挙げておし寄せる。

防波堤に叩きつける高波の轟音も凄く、白い爆風のように舞い上がり、港内で息を潜めるように船体をきしませる小型漁船の光景。

どうも倉本聰の脚本で映画化された、高倉健主演の「駅」のワンカットのようだが、こんな漁師町に生まれた私には石炭ストーブと本とのこんな想い出がある。

身も凍る外の寒気とはうらはらに、ストーブの燃える部屋だけは夏のように暖かい。

小さな木造校舎の小学校に、いつも決まって石炭ストーブの燃えている人気のない教室があった。大きな机が置かれ、壁には木製の本棚が並び、子供の手に余る大型本が威厳を持って並んでいた。

自由に出入りしてよいはずの図書室だったが、なにか特別な空間に映っていた。好きな本を取り出して読むに

は、どことなく違和感を覚える雰囲気でもあった。それでも「図書委員」となって本と接した時の借り物のような自分に不思議な感動を覚えたものである。

有島武郎の小説『生れ出ずる悩み』を読んだのも、中学校「図書室」であった。そのモデルとなった漁夫画家・木田金次郎が、私の自宅近くに住んでいたのは、信じられなかった。

絵の好きな私に、父が紹介してくれるといった画家こそ晩年の木田金次郎であった。

細身の体躯に正(しょう)ちゃん帽を被り、海辺でスケッチする姿がいまも記憶に新しい。どこか気難しげな表情から近寄り難さを覚え、絵に執着心のなかったこともあって、小説のモデルと親しく接する機会を逃してしまったのが唯一心残りであった。

中央画壇に与みせず、頑迷なまでに郷里に留まった姿勢が、「孤高の画家」と呼ばれる所以であり、他人を寄せつけない晩年の相貌でもあった。

その木田の招きで一度だけこの町を訪れたことのある有島武郎は、札幌に寄居していた明治四三年、初めて木田青年と出会った。この時、木田金次郎一七歳。有島は三二歳。

有島武郎は木田の印象を、小説『生れ出ずる悩み』にこう記す。

〈君は少し不機嫌さうな、口重い、疳で脊丈が伸び切

人文会創立二十周年記念出版

人文科学の現在

——人文書の潮流と基本文献——

今、話題の人文科学におけるテーマ、現代思想(宇波 彰)、時間・空間(村上陽一郎)、人間関係(齊藤勇)、女性(芹沢俊介)、老い(今村仁司)などについて、第一線で活躍する二十名が執筆。さらに人文科学分野別基本図書三五〇〇点を収載。

A5判/三六頁/二〇六〇円(税込)

発行

人　文　会

東京都文京区本郷5-32-21

みすず書房内

電話 03-814-0131　〒113

らないと云つたやうな少年だつた。汚ない中学校の制服の立襟のホックをうるさゝうに外したまゝにしてゐた、それが妙な事にはつきりと私の記憶に残つてゐる〉

〈君は座につくとぶつきらぼうに自分の描いた画を見て貰ひたいと云ひ出した〉

有島は、素朴で朴訥な人柄と粗削りな絵の中に、「漁夫画家」の才を見抜いたのか、文学者の魂が刺激されたように大正七年三月一六日から大阪毎日と東京日日新聞に彼をモデルにした小説を連載した。

その有島武郎の文学碑が、この町の観光名所に建っている。

だが、この町に「図書館」はない。

あるいは、漂泊の歌人石川啄木が函館からの小樽に向かう列車の中で見た町、倶知安町。

真夜中の
倶知安駅に下りゆきし
女の鬢の古き痍あと

啄木はこの町を詠んだ。だが、岩内に近いこの町にも、やはり「図書館」はない。

文学碑があったり、歌に詠まれた町ゆえに「図書館」が必要だというのではないが、このような町に「図書館」がないという実状が、図書館の少ない北海道の象徴的事例に思えてならないのだ。

翻って、北の都札幌——。

この街に公立図書館が出来たのは明治三二年。北海道教育会が附属図書館を開設したのを起源としている。

ただ、明治四年開拓使の招請で指導に当っていたアメリカ人ケプロンが、時の開拓次官黒田清隆に当てた書翰のなかで、

〈都ノ教化ノ進歩ヲ補クルニハ、文房（ライブラリー）及ヒ博物院ノ欠ク可カラサルハ当然ナリ〉

と、図書館と博物館の必要を説いている。

明治九年八月、札幌農学校が開校し、ケプロンの提言を生かしたのか「書籍室」が設けられた。

開拓使の事業の中でも、明治六年の「新聞紙閲覧場」の開設は意義深く、図書館設置の気運を盛り上げることになった。

そして、明治一六年三月、札幌県師範学校教員の前野

長発が「司典社」を設け、自らの蔵書「七〇〇冊」を公共閲覧に供した、これが札幌における「公共図書館」の最初であった。

いま札幌のシンボルとなっている「時計台」。ここに「札幌区教育会附属図書館」が置かれていた時期もある。「市立札幌図書館」としての開設は、戦後の昭和二五年五月である。

現在地での図書館は、中央図書館を本館とし、八地区図書館と七区民センター図書室、移動図書館車、地区センター図書室など、合わせて蔵書約百二十万冊。図書費・資料費で一億五千万余りの規模となっているが、地区図書館新設の市民要望も根強い。

しかし、北海道の中心都市として、さらに北方圏都市の拠点として生活・文化に力点を置き、二十一世紀を見通した生涯学習・高度情報化の時代に即応する図書館構想も準備され、平成三年「新中央図書館」開設に向けているところだ。

ところで、本を提供する出版社と図書館利用者との間に立つ図書館及び図書館人として、なにを成しうるだろうか。

公立図書館にありがちな行政サービス上における役割とか使命というしかつめらしい論じ方は遠慮して、ざっくばらんに、しかし、自戒の意味も込めてこのテーマを考えてみた。

情報や流通における東京と札幌の「時差」は、どの程度あるのだろうか。羽田－千歳間の飛行時間は約一時間三〇分。ファッション情報や流行のテンポも東京と札幌とでは約一ケ月程度に縮まったといわれる。

エア・カルゴが発着し、流通上での時間の短縮は急上昇しているが、週刊誌や新刊本が店頭に並ぶには日時のズレはある。時間を省略することはできても、日本列島の北に位置する距離が縮まったわけではない。

つまりは、運送経費の負担増がついてまわるだけである。

余談だが、関西に出張した知人が北海道に来たことのないという人に、熊をペットがわりに飼っていると話したところ、真顔で信じられたといって笑っていたが、まだまだ「本州並み」に理解されない一面もある。

しかも、出版情報の分野では依然不足している。この

出版情報の不足というハンディだけでも、どうにかならないものだろうか。

出版業界の中でも、常にベストセラーを出し続けるような大手出版社などは、マスメディアを通じて、全国津々浦々まで宣伝に努める。こうした出版物も利用者の多くが望む対象ではあるけれど、不足しているのは地味ながらも意義ある出版を続けている小出版社の情報や出版物である。あるいは、「人文会」に見られるジャンル別に出版社を横断した組織の、きめ細かな資料情報が欲しいのである。

北国という遠隔地のハンディーを抱えるだけに、僅小出版物の確保は難しい。こうした情報をいち早く得て利用者に提供することが、選択の機会を広げてもらう手段となりうるのだ。

「夢物語」と笑止されるのを承知で思いをめぐらせてみた。

電算機の普及が著しい図書館では、いまデータの活用が強く望まれている。そこで「人文会」を始めとし、他に医学系あるいは理工系の出版界を横断する会を含めて、各これらの出版情報をデータバンク化できないものだろうか。

つまり、出版情報を集積して、キャプテンシステムのような回線を使い、電算化図書館が直接そのデータを利用できるとすれば、利用者への情報提供は格段に普及する。さらに、手持ちの部門別蔵書データとを対比することで欠落資料の補充や購入など、深度の高い資料・図書収集ができることになる。

流通上においても、取次・書店を経由する図書購入が、大幅に時間短縮されるだろう。

東京と同じレベルで出版情報を知ることができ、さらに、手に入りにくい出版物の情報も入手できるとなれば、利用者にとっては最高である。

あくまでも「図書館」側から考えた一方的な発想であり、「夢物語」であることをご承知おきいただきたい。

さらに「夢物語」のアクセルをふかしてみると―。

全国を北海道・東北ブロックといったエリアにわけ、その地域内を統括する公共図書館をセンター館として、「人文会」のような出版界を横断する組織からの情報集収と全出版物を集約化する機構の確立である。

自由競争を原則とする現在の出版界で、いわば流通の

特例のような機構をどこまで認知できるのか。その一方で、受皿となる公共図書館同士の協力体制をどう確立するか宿題は多いのだが。

近い将来国立国会図書館の大阪「分館」が具体化するようだが、じつは、この国立国会図書館のようなライブラリー施設を増やすことである。全国をブロック化し、都道府県と政令指定都市を縦断し、前出のように東北・北海道ブロックにおいて、道と札幌市が拠点図書館となる機構である。

そこには、日本で発行される総ての出版物が保管され、一般閲覧できる状態で開放するのである。

あるいは、札幌を中心とする圏域を設け、出版物を機能的に分散収集する構想もある。現に千葉県内の公共図書館では浦安を軸として県内の公立図書館が蔵書機能を分担して収集しているとも聞く。

図書館が利用者の出版要望を集約し、出版要望を出すことも、やはり「出過ぎ」た提案だろうか。

つまり、読みたいテーマの本を、書いて欲しい執筆者に――との目的出版になるのだが。ジャンルやテーマ別に、利用者が望む出版物を、例えば人文系のジャンルなら「人文会」に対して図書館から企画を出し、出版社間で調整した上、要望に近いジャンルを得意とする出版社から出していただく。

出版社の情報網で、独自に書き手や研究者、学者の発掘を行い本にしていただく――というものである。

出来上がった出版物は、当然僅少部数となるはずだから、一般書店での販売はもとより、基本部数を全国の図書館が確実に購入するという条件で、全国の図書館必備図書として購入体制を作りあげておくことになる。

利用者と直に接する「図書館」でコミュニケーションが図られ、対話の中から生れた出版物は、再び「図書館」を通じて利用者に提供させるという、利用者・図書館・出版社という関係に初めて有機的な結合が図られる。理想であるゆえに、やはり「夢物語」の域を出ていないのだが――。

もう少しこの「夢」の続きを展開してみたい。

というのも、「図書館」側から「人文会」のような業界を横断する組織を見た場合、単なる親睦組織というより、横の繋がりを活かせる組織としてつい期待をかけて

しまいたくなるからだ。

例えば、次のような要望も頭に描いてしまう。

――ヤングアダルト分野のさらなる拡充

活字離れ世代といわれるヤングアダルト層。これまでどちらかといえば、視聴覚を重視した傾向になかったか。ヤング層を「テレビ社会の申し児」と捉え、活字離れの顕著さから、図書館に「AVコーナー」設備を導入するのがその好例である。

最近、「小説」を聞かせる（テープ化）販売の傾向も顕著だ。だが、「YA」に限ってみれば視聴覚テープ類がまだ少ないのではないか。

外国文学も含め、例えば太宰文学が「語り文学」といわれ、朗読に馴染む文体である作品の特性を生かし、「読む」小説の普及を一層望みたい。

一方、対置する「黙読文学」の場合、例えば筑摩書房の企画にある「文学の森」のような、テーマ別に作品を網羅した文芸出版は「図書館」利用者の人気も高い。

作品本意に企画し、集約したコンパクトサイズの本は、裾野の広がりを見せる読書傾向を見事に先取した好例といえよう。

かつては、世代ごとに読むべき対象の「文学」ランクもあったが、昨今のヤングアダルト層の様変りは否めなく、喰いつき易いテーマ別の出版が好評を得るなら、「文学」に触れる機会となるだけに、けっこうなことだろう。

――北欧・東欧出版物情報の提供と翻訳化

これまで、「図書館」利用者からも強く望まれているジャンルとして、古典もの現代ものを問わず北欧・東欧出版物の邦訳化が挙げられる。

出版事情についての情報も少なく、積極的な翻訳出版を望みたいところだ。

こうした市場性の低い出版物こそ「人文会」のような組織で克服できないものだろうか。押し付けになるが出版界の「社会還元」の意味を込め、前出のような全国の図書館向けに出版して欲しいジャンルの一つである。

図書館人の一人として、自らの立場にも触れておく必要がある。

公立図書館の場合「図書館行政」という言葉がよく使われる。

つまり、利用者に対する奉仕活動のほかに、日常業務がどれだけの行政効果を上げているかという、仕事の「費用対効果」を問う視点である。

その目安となるのが「貸出し冊数」である。図書館を訪れる利用者がどれだけ図書を借りているか、図書館の基本となる「効果数」でもある。

だが、単に貸出し冊数だけを考えるなら、利用者に便利な場所を選び、目一杯の費用を投じて話題の書籍ばかりを並べ、民間会社に委託して運営すれば期待する数字は十分得られる。

だが、行政効果の基準とされる貸出し冊数だけで「図書館」の奉仕業務は、推し測れない。

地域における図書館の役割りや指針を明らかに示し、百年、二百年先まで、幾世代をも支えていく生涯学習の場として果す図書館の使命は、こうした表面的な数字だけで予算を査定すべき対象ではないはず。単年度予算主義を採用している日本の役所機構においては、どうしても短い期間での「行政効果」を論じる傾向にある。

それゆえに、社会文化の行政のカジ取りは行政管理者のセンスに負うところが大きく、将来へ禍根を残すような「図書館」運営をすべきではないことはいうまでもない。役人の発想を薄め「文化」度を濃くするうえからも、できれば「館長」の民間人化、文化人をスカウトするぐらいの度量は欲しいのだが——。

あたりまえのことだが、図書館一人ひとりに求められることは、利用者サービスの重層化を図るため、図書館人としてのプロ意識を持ち、より広い見識と、情報に対しては柔軟な姿勢をもって図書館の質の向上を目指すことである。

巨大な森林資源を管理育成するように、地域社会の所産であり知の倉庫でもある「図書館」を、出版界と利用者の間でどんな役割を果せるのか、図書館人の一人として、改めて感奮させられる基本テーマでもある。

北海道研修旅行報告

弘報委員会

人文会の主な活動のひとつに「研修旅行」があります。一九六九年より始まり、一九八七年で一九回をかぞえ、全国をほぼ一巡いたしました。（昨年は、小会の二〇周年事業のため休止）

さて、今年は二〇回目の研修旅行として、六月に北海道を訪問いたしました。北海道を訪れるのは第四回（一九七二年）の研修旅行以来になります。今回は、東販の安井書籍部長（現取締役首都圏支社長）と日販の平野書籍仕入部長にご同行いただき、総勢二三人で羽田を出発しました。研修旅行の主な目的は、書店さん・取次店さんの方々とお会いし意見交換を行い、人文書販売の協力体制を築いていくことであり、特に小会を支えている特約・準特約店の方々とより確かなパイプをつくることにあります。

日程は次の通りです。

＊　＊

〔六月一三日〕旭川：ブックス平和神楽店・旭川富貴堂・三省堂書店旭川店（準特約店）見学

〔六月一四日〕北見：福村書店見学、釧路：釧路ブックセンター・山下書店見学

〔六月一五日〕帯広：田村書店見学、札幌：北海道大学生協・北海学園生協・北星学園生協との研修会、北大生協学生書房クラーク店（特約店）・旭屋書店札幌店（特約店）見学

〔六月一五日〕札幌：札幌中央図書館見学および研修会、紀國屋書店札幌店（特約店）・丸善札幌支店（特約店）・パルコ富貴堂（特約店）・東販および日販北海道支店見学、小樽：紀國屋書店小樽店見学

＊　＊

最初に、訪問させていただきました書店さんに厚く御礼申し上げます。お忙しいところ、棚を拝見し店長様そして担当者の方々と意見交換を行う事が出来、大変参考になりました。訪問するチャンスの少ない旭川・北見・釧路・帯広・小樽の各書店の立地や商品構成を見ることにより、今後の営業活動をきめこまかく行うヒントを得ることが出来たと思います。

例えば、北海道においても郊外型書店の出店が多いと聞いております。市の中心部の書店にとって、顧客サービスの柱として駐車場の確保は必要なことだが、実際にそのスペースを確保することは困難なことだとお伺いいたしました。それでは、どうしたら来店していただけるようにするか。それは、やはり品揃えが中心になるのではないでしょうか。限られた棚数の中で、人文書の全文野を展示するのは不可能であるなら、客層等を見きわめながら、いくつかの分野に重点をおく、あるいは特定の著者の本をコーナー化してみる、などの方法を試みてみる。

その時の要件としては、各会員社の協力は不可欠になると思いますし、また各会員社は協力を惜しみません。二年に一回行う特約店調査の結果によりますと、一九八六年と八八年の売上の伸び率は五％（冊数比）になります。人文書の売上は、着実に増加しておりますので、より一層の協力体制を築いていきたいと思います。

＊　＊

札幌の各書店を拝見いたしますと、その品揃えの豊かさに、何かホットするものがあります。なぜかといいますと、普段見慣れた東京の書店さんと変わらない店内風景だからです。と同時に帯広の田村書店さんのことばをおもいだします。「札幌ばかりに顔を向けないで、各市でガンバッテいる書店さんに、手紙でも電話でもいいか

ら連絡を下さい。それによって、ガンバロウと思うものですよ。」

人口でみますと、札幌市は全道の二七％を占めています。旭川・釧路・帯広・北見・小樽の各市の合計は、札幌の六四％です。札幌市が大きな商圏であることは動かしようもありませんが、しかし札幌だけが全てではないことを再確認したいと思います。

＊　＊

一六日の三大学生協との研修会は、札幌地区大学生協連合会の高杉氏、各生協書籍部の責任者および取次担当者（東販）にご出席いただきました。最初に高杉氏より大学生協北海道地方連合会と札幌近郊の七生協で構成している地区連合会の説明がございました。また、各生協の概要についてお話しいただきました。

会員社からは、専門書の講入率が高い教官・院生・図書館への販売促進について具体的な質問がだされ、短い時間でしたが充実した研修になりました。なお、八月に高杉氏より各大学におけるダイレクト・メール関係の資料をお送り下さいましたこと、厚く御礼申し上げます。

＊　＊

一六日の札幌中央図書館との研修会は、日販北海道支店で行い、図書館側からは永井業務課長をはじめ七人の方々にご出席いただきました。書店を代表して成美堂書店の川人義信氏・富貴堂書店の桜井勝治氏そして新線堂の細川長幸氏および日販の担当者の方にもご参加いただきました。

なお、研修会に先立ち中央図書館さんのご好意により館内を見学させていただきました。厚く御礼申し上げます。

さて、阿部開設主管からは札幌市の図書館体制・選書システム等についてご説明がございました。実際の業務についてその流れを存じませんので、参考になりました。また、来年度完成予定の新中央図書館につきましてもお話しいただきました。たとえば千葉県の浦安市立図書館のように、根源的な試みをされている図書館があります。全国で、図書館がかわりつつあるのではないかと思いますので、将来展望をふまえた、より一層充実した中央図書館になるよう取り組まれている札幌中央図書館に注目していきたいと思います。

＊　＊

最後になりましたが、東販さん・日販さんの皆様には大変お世話になり、厚く御礼申し上げます。

東販北海道支店の見学は、業務開始直前のあわただしい時にお伺いいたしました。

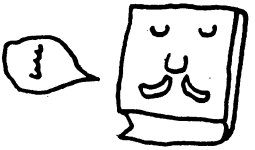
日販北海道支店におきましては、中央図書館との研修会会場をご提供いただきました。

東販石川支店長、日販高橋支店長をはじめ、各セクションの方々に、重ねて御礼申し上げます。

＊　＊

研修旅行は、広大なる北海道を駆けめぐるため、きびしいスケジュールになりましたが、書店さんのあたたかい心づかいで疲れをいやすことが出来ました。福村書店さんのビール、山下書店さんの牛乳、田村書店さんのワイン――みんなおいしかったです。

さて今回の研修は様々な「種子」を集めることができました。各会員社の課題は、この「種子」をいかに育て、大きな「実」を結ばせるかということだとおもいます。



消費税アンケート調査結果

調査・研修委員会　菊池明郎

人文会では、七月下旬に特約店、準特約店に「消費税アンケート」を実施致しました。その最終的な集計ができましたので御報告をしたいと存じます。

人文会会員社が最も関心を抱いていることは、十月一日以降、書店さんが消費税対策をどのようにされるかということと、また現状がどうなっているかということです。

一方、会員各社の在庫品の新定価表示への切り替えは、九月末までにすべて完了できそうにもなく、旧定価表示本の在庫はその時点でどう扱われるのか大変気になるところです。この原稿を書いている九月初めの時点では、まだ出版社側と流通側の話し合いがなされている途中で、最終的にどうなるのか分っておりません。

さて、人文会アンケートについて具体的に御報告を致します。実施総数は二五〇通で、回答は一五八通（回収率六三・二％）あり、異例に高い回収率でした。書店さんの関心の高さが、このことからも推察できます。まず現状に関しては、旧定価本のレジ転嫁は、うまくいっていると、何とかなっているを合わせて、一五四（九七・四％）あり、多少手間がかかっても現場の方々は馴れて

きたようです。レジの入れ替え経費はかなりまちまちですが、八七店（五五・一％）が何がしかの費用がかかったとお答えになり、ゼロとお答えになったところは、プログラム変更で済んだということでした。消費税に伴い人員増をしたかという設問には、一三二（八四・八％）が変化なしというお答えでした。一円玉の端数処理は、順調（三七）・多少の混乱はあったが馴れた（八二）ということで、両者を合わせると一一九（七五・三％）になり、おおむね何とかなったと判断できます。本の定価の端数についてお客から苦情が出ているかという設問には、ほとんどない一二四（七八・五％）、全くない一六（一〇・一％）ということで、意外と読者はこのことで不満が少ないと言えます。十月一日以降、店頭に残った旧定価本のレジ転嫁について、続ける五二（三二・九％）、四団体の決定に従う九二（五八・二％）という結果でした。十月一日以降、客注品が旧定価表示しか無い場合どうされるかという問いに対しては、旧定価本を取り販売するが一二八（八一％）と圧倒的に多く驚かされました。定価をどう考えるかということでは、定価は本体価格という見解が六九（四三・七％）、定価は本体価格プラス消費税が六三（三九・九％）という結果でした。その他具体的な御意見を多数頂きましたが、外税でやるべきだという御意見が多かったのが目立った点でした。

十月一日直前の段階で、店頭に残った旧定価本は、必ずしもすべて新定価表示に切り替えた本が出版社にあるとは限りません。返品をされた場合、補充できないケースも多くでるでしょう。またこの時期に返品が集中することも、好ましくありません。ぜひとも、レジ転嫁を継続して下さい。また、客注品で旧定価本しか在庫が無かった場合、その本が流通するバイパスが確保されると助かります。

消費税が廃止になる可能性もあるような政治情勢です。三月段階とはこの点大きく変化しました。今後出版界としてはどう進むべきか、小会のアンケート結果も参考としながらお考え下さい。

＜消費税アンケート＞

1989. 7.

（・アンケート実施店数　250店
・アンケート回収数　158店
・回　収　率　63.2%）

1　旧定価本の消費税徴収にあたって、レジ転嫁はうまくいってますか。
a.　うまくいってる――76（48.1%）　b.　何とかなっている――78（49.4%）
c.　お客とのトラブル等が多く混乱した――3

2　レジスターの入れ替え等、消費税導入に伴い、どの位経費がかかりましたか。
・0円――16　・10万円以下――17　・50万円以下――28　・100万円以下――14
・200万円以下――12　・300万円以下――12　・300万円以上――4
・無回答――61

3　消費税導入に伴い、人員増をいたしましたか。
a.　変化なし――134（84.8%）　b.　増員した――24（15.2%）

4　一円単位の端数処理はうまくいってますか。
a.　順調――37（23.7%）　b.　多少の混乱はあったが馴れた――80（51.3%）
c.　いまだに困っている――35（22.4%）　・　不明――4

5　4でcと答えた方へ。困っている理由をあげて下さい。（複数回答）
a.　一円玉の不足――19　b.　釣銭のやりとりに時間がかかりすぎる――38
c.　その他――7

6　本の定価に端数が生じていますが、お客様から苦情が出ますか。
a.　多い――18（11.4%）　b.　ほとんどない――124（78.5%）
c.　全くない――16（10.1%）

7　10月1日以降、店頭に残った旧定価本はレジ転嫁を続けますか。
a.　続ける――52（32.9%）　b.　四団体（書協、雑協、取協、日書商連）の協議で決まったルールに従う――92（58.2%）　c.　定価○○円を税込みとみなして販売する――2　d.　即返品する――9　・　不明――9

8　10月1日以降客注品を発注した際に、出版社が旧定価本の在庫しか持っていない場合どうしますか。
a.　お客様に品切と答える――2　b.　旧定価本を取りお客様に販売する――128（81.0%）　c.　分らない――24（15.1%）　・その他――4

9　定価＝本体価格と考えるべきだという見解についてはどう思われますか。
a.　正しい――69（44.2%）　b.　定価は本体価格＋消費税である――63（39.7%）
c.　分らない――19（12.0%）　・　不明――6

10　新定価表示本のうち、シール貼付本の売行きはどうですか。
a.　装丁に悪影響を及ぼし、売行きが低下した――14（8.8%）　b.　従来と比べて特に変化なし――77（48.7%）　c.　装丁は影響を受けたが、売行きは変化なし――61（38.6%）　・　不明――6

11　レジに定価を打ち込む際は、本のどの部分を見ますか。（複数回答）
a.　スリップ――11　b.　カバーの定価――130　c.　帯の定価――21
d.　その他――10

弘報委員会より

○今や「音楽」は、私たちの生活の奥深くに浸透しています。とくに、ここ数年のクラシック音楽の隆盛はすごいものがあります。マーラーブームしかり、オペラブームしかり、コンサートブームしかり。「音楽」から「本」へつなげることが出来ると思いますので、「人文書講座」の文献をご活用下さい。

○〈「図書館」北の国から〉において、出版社はもちろん図書館側にとっても実現可能な「夢」を書いて下さった川嶋氏に厚く御礼申し上げます。

○本誌に適したテーマがございましたら、当委員会までお知らせ下さい。

次号は、九〇年一月刊行の予定です。

人文会会員名簿

（〒113　文京区本郷5-32-21　みすず書房内）　　1989. 10. 現在

	社名	担当者	〒	所在地	電話	FAX
	青木書店	古川　清	101	千代田区神田神保町1-60	292-0481	292-0475
	大月書店	原田　敦雄	113	文京区本郷2-11-9	813-4651	813-4656
	御茶の水書房	平石　修	102	千代田区九段北1-8-2	230-2510	265-7767
	紀伊國屋書店出版部	佐久間健雄	156	世田谷区桜丘5-38-1	439-0125	439-3955
	勁草書房	氏家　富男	112	文京区後楽2-23-15	814-6861	814-6854
	社会思想社	渡辺　和彦	113	文京区本郷3-25-13 中銀本郷3丁目ビル	813-8105	813-9061
幹事	春秋社	澤畑　吉和	101	千代田区外神田2-18-6	255-9611	253-1384
	晶文社	萬洲　隆男	101	千代田区外神田2-1-12	255-4501	255-4506
	誠信書房	濱地　正憲	112	文京区大塚3-20-6	946-5666	945-8880
	創元社	重光　義彦	162	新宿区山吹町334-11	269-1051	269-1092
	筑摩書房	菊池　明郎	111	台東区蔵前2-6-4 マスダヤビル	5687-2680	5687-2685
	東京大学出版会	竹内　康一	113	文京区本郷7-3-1 東京大学構内	811-8814	812-6958
	日本評論社	菅田　誠	170	豊島区南大塚3-10-10	987-8621	987-8590
	福村出版	土屋知可夫	112	文京区小石川1-3-17	813-3981	818-2786
幹事	平凡社	須田　康昭	102	千代田区三番町5Kビル	265-0455	263-9333
幹事	法政大学出版局	市川　昭夫	102	千代田区富士見2-17-1 法政大学構内	237-1731	237-8899
代表幹事	みすず書房	相田　良雄	113	文京区本郷5-32-21	814-0131	818-6435
	未来社	西谷　能英	112	文京区小石川3-7-2	814-5521	814-8600
幹事	雄山閣出版	武　一雄	102	千代田区富士見2-6-9	262-3231	262-6928
幹事	有斐閣	辻村　清隆	101	千代田区神田神保町2-17	265-6811	262-8035
	吉川弘文館	阿部　昇	113	文京区本郷7-2-8	813-9151	812-3544

販売企画委員会　◎辻村　○重光　氏家　渡辺　菅田　西谷　阿部
弘報委員会　◎澤畑　○土屋　古川　平石　萬洲　竹内
調査・研修委員会　◎市川　○原田　佐久間　濱地　菊池
◎印は委員長　○印は副委員長

歴史知識の源泉。

『内容見本』送呈

国史大辞典 全15巻

第10巻（と―にそ）

新刊発売中

定価一四、四二〇円（税込）

総項目四万五千、日本歴史の全領域をおさめ、さらに周辺分野からも必要項目をことごとく網羅した最高の定本的歴史大辞典。既刊＝第1巻～第10巻

吉川弘文館

東京都文京区本郷7－2・電話03－813－9151

現代社会と人間観の基本問題を解明

言語的コミュニケーションと労働の弁証法

尾関周二著

46判（税込）予3100円

6月下旬発売

人間起源論、人間本性論、疎外論、認識論などをとおして、人間と自然、人間と人間の基本的関係を媒介する〈労働〉と〈言語的コミュニケーション〉の区別と内的連関を見事に解明した意欲的労作

大月書店 東京都文京区本郷2-11-9 電話03-813-4651〈代〉

東京裁判ハンドブック

東京裁判ハンドブック編集委員会◉編 ￥3000（税別）

極東国際軍事裁判（東京裁判）と各地のＢＣ級戦犯裁判の経過・判決・処遇など，その全容を具体的かつ平明に解説する事典。

日本の戦争責任，ドイツ・イタリアの戦犯追及の概要とともに，基本統計類と基礎資料などを収載して，戦争犯罪・戦争責任問題を考える共通の手がかりを提供する！

青木書店

東京都千代田区神田神保町1 ☎03-292-0481

御茶の水書房

人間復興のテクノロジー

マイク・クーリー／監訳＝里深文彦（コンピュータ化時代を生きる倫理）ルーカス・プランの知的リーダーであった著者の科学技術と労働のあり方を問う実践的理論書 ●定価3296円

農業を守る意味 北の国から私の実践

佐藤喜作（秋田仁賀保町農協組合長）〝農の営み〟の喪失に悲嘆し、忘却に驚愕しつつも日々その再生と創設に精励する著者自身の実践的書下ろし評論集。〈好評発売中〉 ●定価1854円

東京・千代田・九段北1-8-2 ☎03(265)5746

山上正太郎著

チャーチル、ド・ゴール、ルーズヴェルト

ある第二次世界大戦

三人の政治家の強烈な個性が繰りひろげる三者三様の国際政治と外交上での動きを中心に、戦争終結までを描く。

定価一九〇〇円(税込)

戦争と新聞 1926〜1935

兵は凶器なり

前坂俊之(毎日新聞記者)著

戦時下新聞は各事件をどう報道したか。記者の目で生ま生ましく検証。

定価一七〇〇円(税込)

社会思想社

東京都文京区本郷3-25 ☎813-8105

読書の歓び

マイナー・クラシックの勧め

N.ペリン／中村紘一訳 知られざる名作40篇を厳選し，その面白さ，楽しさを明快に語る。▶2600円(税込)

母系社会の構造

サンゴ礁の島々の民族誌

須藤健一 ミクロネシアの母系社会に生きる人びとの家族・人間関係をいきいきと描き出す▶2500円(税込)

自己喪失の体験

B.ロバーツ／雨宮，志賀訳 自己を喪失した後の不思議な体験を綴り，自己の本質に迫る。▶1860円(税込)

紀伊國屋書店

本 店：東京都新宿区新宿3 ☎(354)0131
出版部：東京都世田谷区桜丘5 ☎(439)0125

「いやし」の技のパフォーマンス

●日野原重明

臨床医50余年、常に医療の最先端を歩んだ著者が、真の癒しをもたらす医療・看護の実践を説く円熟の最新講演・対話録。一四五〇円

老いと死の受容 一三三九円

いのちの終末をどう生きるか 一三三九円

健やかないのちのデザイン 一四四三円

▶定価は消費税込み

東京都千代田区外神田2-18-6 春秋社 ☎(03)255-9611 振替東京8-24861

中村かつろう

リゾート革命

体験的地中海クラブ論 リゾート文化の意識革命を説く。1650円〒260

河部利夫

タイ国理解のキーワード

タイのこころを知るための鍵を提供する楽しい読み物。2060円〒260

T.A.シービオク／池上嘉彦編訳

動物の記号論

生物学／生命科学と密接する記号論から動物行動を探る。2480円〒260

クリッペンドルフ／三上俊治他訳

メッセージ分析の技法

「内容分析」への招待 シンボリックな現象を捉える。 2987円〒310

＊定価は消費税込みです。

東京文京後楽2-23 勁草書房 振替東京5-175253

創元社

◉周 達生

中国の食文化

日本の二六倍の広さと五六の多様な民族を擁する国、中国。各地のさまざまな味覚、道具、食物などのルーツと変遷をたどり、さらに日本の食文化にも論及した刺激的なフィールドワーク。多民族の多様な食文化のシンフォニーが聞えてくるような本＝日経新聞書評。

A5判・480頁　定価＝3,800円

大阪市北区西天満1・4・2　☎06-363-2531
東京都新宿区山吹町334・11　☎03-269-1051

嘘、秘密、沈黙。

A・リッチ女性論

大島かおり訳　女とは何か。女として生きるとはどういうことか。常にフェミニズムの原点に立ちもどりつつ、その最前線を歩んできたアメリカの代表的詩人の思考の軌跡を初紹介。**2960円**

写真幻論

大島洋　写真が形成するさまざまな神話を暴き、その力と毒を解明する。アベドンや高梨豊などの写真論をふくむ、気鋭の写真家が実践から紡ぎだした写真の根源へのアプローチ。　**2000円**

晶文社　東京都千代田区外神田2-1-12　電話（255）4501

意欲的書下し！

吉本隆明著

宮沢賢治

生涯を決定した法華経信仰の理念が、独特な自然の把握や無償の資質と溶けあう地点に、すべての〈宮沢賢治〉像の基礎を画定する。著者長年の関心に決着をつける、賢治論の決定版。

◆近代日本詩人選13

定価2160円
（税込）

東京台東　筑摩書房　蔵前2-6-4

サイコシンセシス叢書1

意志のはたらき

R.アサジョーリ／国谷誠朗・平松園枝訳
自己開発と意識の拡張をはかり，宇宙的な意志に融合するための意志のトレーニング・マニュアル．　**2400円（税込）**

家族依存症

仕事中毒から過食まで

斎藤　学著　人間関係の破綻から自分の自由になるモノに執着する人々とその家族のメカニズムを明らかにし，そこからの回復の道を探る．　**1500円（税込）**

誠信書房　東京都文京区大塚3－20－6　TEL.03－946－5666

宮家 準
宗教民俗学
祭、年中行事、昔話、物語などを素材に民間信仰・民俗宗教の内部構造と、その根底にある日本人の宗教的世界観を解きあかす。
四六三五円(税込)

養老孟司編
心のはたらき
心とはなにか、心の病、心の医療、心と愛、宗教と心、など医学・文学・宗教・社会学等の広い領域から「心」を論じる。
シリーズ・人間と文化4
二四七二円(税込)

E・キーン／吉田章宏・宮崎清孝訳
現象学的心理学
人間理解のために、ある具体的な日常的出来事の人間的意味の解明を通した、"現象学的に心理学する"ための方法論と基礎概念。
三〇九〇円(税込)

東京大学出版会
113 東京都文京区本郷7 ☎03-811-8814

イコンとイデアの鬱然たる森の中に
射す光。巨大な書庫の扉が開かれる。

ヴァールブルク・コレクション

ゴシック建築とスコラ学
E.パノフスキー 訳=前川道郎★2,000円

ルネサンス精神の深層
A.シャステル 訳=桂芳樹★2,800円

古代芸術のコスモロジー
神話と寓意表現
R.ヒンクス 訳=沓掛良彦他●定価3,000円

ヴァロワ・タピスリーの謎
F.イェイツ 訳=藤井康生他●定価4,330円

10月刊行予定『ルネサンス絵画の社会史』

平凡社
〒102 東京都千代田区三番町5 Tel.03-265-0455
★印は消費税が加算されます。●印は税込です。

■好評発売中■

応用心理学講座 12
生命科学と心理学
●糸魚川直祐・日高敏隆編
遺伝子操作や臓器移植など、最先端の生命科学技術を総覧し、人間の一生の意味を考え直す。
A5判／定価三九一四円(本体三八〇〇円)

B・ベッテルハイム著・中野善達訳編
情緒的な死と再生
治癒不能と宣告された四人の重度情緒障害児の原因と治療過程を克明に描いたドキュメンタリー。
A5判／定価一二三六〇円(本体一二〇〇〇円)

東京・文京 小石川1-3 **福村出版** 電話(03) 813-3981

法政大学出版局

人間と自然界
キース・トマス　西欧近代における人間と動植物とのかかわりの歴史を社会の動態として生き生きと描き出し，エコロジー思想の伝統を発掘する．山内昶監訳／3914円

サラワクの先住民
イブリン・ホン　マレーシア・サラワク州の伝統的生活文化を記録しつつ，熱帯林の濫伐と開発の波が先住民の生存を脅かしている現状を告発．北井・原後訳／2781円

フランス革命と芸術
スタロバンスキー　〈1789年・理性の標章〉革命史の過程を啓蒙の栄光と苦難の歴史として捉え，芸術の展開との間に潜む深い精神史的照応を描く．井上堯裕訳／2678円

―― 価格は消費税込みです ――
東京千代田区富士見2 ☎237-1731

非売品

1989年10月20日発行　年4回発行　第56号
発行所　人文会　みすず書房内
〒113 東京都文京区本郷5－32－21

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印